
ほおずきの思い出

ふぐるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほおずきの思い出

【Zマーク】

Z7775

【作者名】

ふぐるま

【あらすじ】

その森には人を食べる魔物が住んでいた。
とある神父と魔物の話。

()

ニシテカガルハル。

「くそつー。じこに居やがる」

夕暮れの森の中、猟銃を持った男たちが右往左往。
「ギヤアアアアア……」

どこかで悲鳴。小枝を踏む音。茂みが揺れる。銃声。舌打ちをして男の一人が振り返る。

視界の端を影が走る。

叫び声。

振り向きざまに一発。

散弾は森の木々にいくつかの痕を残したただけだ。
あちらこちらで銃声が響く。

悲鳴が聞こえるたび銃声が少なくなっていく。
もうすぐ日が落ちてしまつ。そうなれば奴を仕留める事はいつそう難しくなる。

いや、むしろ日没後はこちらが狩られる側にまわつてしまつだらう。
撤退の指示を出すかどうかで迷つてゐる間に太陽は沈んでいく。
気がつくと悲鳴も銃声も聞こえなくなつていた。

男は溜め息を吐き樹にもたれかかる。

前方数メートル先の草むらから奴が出てきた。

金髪に黒いスカート。黒のベスト。胸元に赤いリボン。手に持つた誰かの腕をかじりながらこちらを見ついてゐる。薄闇の中、表情は分からぬ。

こんなガキが腕利きの狩人5人を殺してしまつたのだ。

男はゆつくりと銃を構え少女に狙いをつけた。
引き金に掛けた指に力を込める。

轟く爆発音。

散弾を全身に浴びながら少女は狩人の胸から心臓を掘み出した。
日は完全に落ちた。

日没の森。月さえ出ていない真の闇の中、前のめりに倒れた狩人の頭を掴むと、少女は何事もなかつたかのように歩き出した。

ある国のある村。

ここには食人鬼の伝説がある。

村の西にある森の中には恐ろしい魔物がいる。金髪で黒いスカートをはいた少女の姿をした魔物の伝説だ。

村人は魔物を恐れて西の森に入らないが時折旅人や子供が迷い込み、大半は無残な姿で村の外れに「捨てて」ある。

「この前村長が雇った狩人はどうなったの？」

「いつも通りさ。教会の入り口に重ねてあつたよ。今神父様が片付けてる」

「まさかこれががきっかけで村まで入つてきたりなんかしないわよね」「大丈夫よきっと。今までだつて教会よりこっちに入つて來た事はないんだから」

水車小屋の前で立ち話をする主婦たち。

先日、件の魔物を仕留めるために雇つた狩人たちが体のいたるところを欠損させて村に返つてきた。

これまでにも何度も自称『腕自慢』を森へ刺客として送つた。しかし誰一人として生きて帰つては来なかつた。

村人の多くは半ば諦めている。

森に立ち入りさえしなければ魔物に襲われる事はない。今までに数多くの対策を立てて、ことごとく敗北した結果から来る諦めだ。人間では魔物に勝てない。

懸命に吐き気を堪えながら火バサミで肉塊を拾つては麻袋に詰める

作業を繰り返す。

シスターの上げた悲鳴で飛び起き、玄関に出て、見て、嘔吐した。おそらく例の『魔物』の仕業なのだろう。奴のせいで悲惨な死体は見慣れているが今回は量が多い分、衝撃的だった。

胃の中の物を吐ききつてから麻袋と火バサミを使い、今この作業だ。

ようやく玄関前の固体物を除去した後にシスターが戻ってきた。

「ひどいですね」

「やけに良いタイミングで目を覚ましたものだな」「化粧まで済ませてやつてきたシスターに皮肉を言つ。

「まあ！ひどいですね。女性にこんな仕事をさせるつもりですか」「こんな仕事も何ももう終つたよ。君は聖堂の掃除でもしていくくれ。僕はしばらく休む」

まだ地面に残つた血痕を見て不満そうなシスターを残して自室へと引き返した。

ベッドの上で横になり思考を巡らせる。

村の人間は少女の姿をした『魔物』が居ると言つてゐる。馬鹿馬鹿しいにも程がある。

どうせ山賊の類が居るのだろう。もしくは狼の群れ。神父をやつているとはいえ迷信の類は一切信じていない。この世に銃で撃たれて傷の付かない物はない。剣で斬られて血を流さない生き物は居ないのだ。

コンコン。

思考にノックの音が割り込む。

「どうぞ」

声をかけるとドアが開きシスターが朝食を持ってきた。

「朝からアレだけの肉を見て、僕が朝食を食べたい気分だと思つのかい？」

思い切り皮肉を言つが神経の図太いシスターは全く気にしていない。

「死者を『肉』だなんて聖職者の言葉ではないですよ」

そういうながらベッドのわきの机にトーストとサラダを置き、自分もベッドの横に腰掛ける。

「どうでも良いじゃないか。とりあえず今は何も食べられない」

「またそんな事言つて。食べないと午後からの作業で倒れても知りませんよ」

そういうえば今夜は村の祭りの日だった。力仕事は嫌いだが、村の一員として祭りの準備を手伝わなければならない。朝一番で人死にがあつたと言うのに能天気なものだ。それだけ祭が「特別」で、『魔物』が「日常」となつていいという事だろう。

僕はシスターの視線を横顔に感じながら嫌々サラダを口に運んだ。

私はある人に恋をしている。

その人は私がシスターとして通つている教会の神父だ。彼は神父をしているくせに無神論者で皮肉屋で、信心の欠片も無い人だが、幼子から老人、動物や植物にまで平等に愛情を注ぐ。

本人は自覚していないのだろうが、私は彼の行動に、幼い頃教会で聞かされた『神の愛』を感じるのだ。

しかしそんな彼は料理も洗濯も、家事の類が全くできない。

幼馴染の義理という名目で毎日食事を作り、洗濯をし、掃除をして、身の回りの世話をしている。

そんな私を邪険に扱いながらも結局は一緒に居させてくれるのも彼の愛情なのだろう。

今だって、文句は言うが私の作った朝食をちゃんと食べてくれている。

例え妻になれないとしても、シスターとして一生彼の側に居たい。

彼は朝食を食べ終わると祭りの準備を手伝いに出かけた。

さあ、私もしなければいけない事がまだまだたくさんある。

村の中央に位置する広場に篝火が焚かれ、普段ならもう暗闇に沈む時間の村が暖色に照らされている。

選び抜かれた村の奏者たちが音楽を奏で、老いも若いも陽気に踊っている。

何の為の祭りなのか理解している村人は少ないだろう。それでもこうして楽しく騒いでいる。

これも祭りの役割だな。

「神父さん。お疲れのようですな」

祭りの喧騒を少し離れた場所から眺めていた僕の隣に、村の男が隣に腰を降ろした。

酒を飲んで赤い顔が炎に照らされてますます赤く見える。

「ええ、慣れない力仕事でしたので」

朝から荷物を運び、松明を作り、実際今にも眠つてしまいそうなほど疲れていた。何度も手伝つても大変なものは大変なのだ。

ただ、これだけ愉快に皆騒いでいるのを見ると、祭の準備に貢献した事が誇らしく思える。

男と談笑していると突然、祭りの騒がしさとは別の騒ぎが起こった。どうやら子供が泣いているらしい。

祭の陽気に対してられて喧嘩でもしたのだろうか。

いや、どうも様子がおかしい。泣き方が尋常ではない。何か、取り返しのつかないことをしてしまったような……。

「ユリーが！ ユリーが森で！」

『森』の単語を聞いた途端、祭は静まり返った。

僕も、僕の隣の男も顔が青ざめる。

「詳しく聞かせなさい！」

子供の父親が詰問する。

「……森で、ユリーが。怖いものなんか無いって言つから……」

泣きながら子供が話す。

最悪だ。

どうやら森に肝試しに行き、はぐれてしまつたらしい。

すぐさま村の男衆を集めて捜索隊が結成された。その中にはもちろん僕も入っている。

祭は一気に冷めてしまった。

暗い森の中、松明を持ち、ユリーの名前を叫びながら練り歩く。
2時間は探しだろうか。時折聞こえる獸の鳴き声以外は返事も無い。

「うちが明かないな」

誰かが呟く。焦りと不安と恐怖が心を蝕んでいく。

その時、前方の茂みから何かが飛び出した。

悲鳴が交錯し、辺りは蜂の巣を突いた様な混乱に陥った。
もと来た道を村人たちがほうほうの体で逃げ出す。

僕も例外ではなかつた。

叫び、走り、気が付いた時には道の無い森の中に一人だった。

『魔物』など居ないと頭では理解していたはずだが実は恐れていたのか。

いくらか冷静になつた頭で考え、自嘲気味に笑う。

とりあえずは道を探さなくては。『魔物』の正体が何であれこの森が危険な事は事実だ。

僕は村へと続く道を探して森の中を歩き出した。
しばらく歩き、音を耳にした。

水氣のある何かを磨り潰すような音。コリーだらうか。近付くにつれて嫌な予感がしてきた。

草むらの向こうからその音は聞こえる。

草むらを搔き分けたその先はちょっとした広場のようになっていた。鉄の匂いが鼻をつく。

星空の下、地面に座り込む子供の姿。

「コリー！」

僕は思わず声を上げた。

だがそこに居たのは探していたコリーではなく別の子供だった。金髪の少女は振り返り、じつと僕を見つめた。

「君はいつたいこんな時間に何をしているんだい？」

違和感は感じている。こんな夜遅く、森の中に少女が一人で居るはずはない。

ましてやここには『鬼』が出ると言われ村の男でさえ立ち入らない禁忌の森だというのに。

「今はお腹いっぱいだからあなたは帰つていよいよ」

少女はそう言つとまた背中を向けてしまった。

そしてまた音。

これは食べ物を咀嚼する音……。

聞きたくない。

見たくない。

また鉄の匂いが漂う。そうだこれは今朝嫌と言つほど嗅いだ匂い。

吐き気が込み上げてきて地面に突つ伏す。

「もう！人が食べる最中に吐かないでよ」

そう言つてもう一度振り返つた少女の口元は真っ赤に染まり、手には子供の脚が……。

シスターが僕を呼ぶ声で目を覚ました。

気がつくとそこはいつもの僕の家で、周りを心配そうに村人が囲んでいる。

どうやら生きて戻ることができたらしい。

昨夜の光景がフラッシュバックする。

気配を察したシスターが桶を差し出し、その中に吐捨て物をぶちまける。

「やはり魔物が……」

村人の輪の中から声が聞こえる。

どうやらここに居る村人の大半は見舞いではなく野次馬らしい。

「何があつたか話すんだ」

輪の中から村長が現れて僕の肩に手を置いた。

穏やかな口調だが発言を拒否させない威圧感が込められている。

その時、僕の頭にはある考事が浮かんでいた。

自分でも驚き、呆れ返るような甘い考え。

少女と出会ったことは話さず、森で逃げ回るうちに転んで頭を打ち、気がついたら村。 そう説明した。

「そうか……」

村長曰く、草むらから飛び出した野生動物に驚き、捜索隊は村へと逃げ帰った。

村で確認してみるとどうやら神父がいない事に気がついた。

鬼に食べられたものとして諦めていたところ、今朝、村の入り口にユリ一の残骸と共に捨ててあったのを発見したそうだ。

何故鬼に殺されなかつたのか、あれやこれやと村人たちの間で議論が始まっている。

どうやら僕が目を覚ますまでに何度も同じ議論は繰り返されたらしい。

村長が一言呼びかけると騒ぎはぴたりと止んだ。

「何か思い出したら言うように。もしかしたらそれが鬼から逃れる手がかりになるかも知れん」

そう言うと村長は村人達を連れて寝室を出て行つた。

家の外からはまた討論する声が聞こえる。なにせ初めて鬼から逃れた人間なのだ。村人達の興味が尽きないのも無理はない。

ふと目を遣るとベッドの脇にシスターだけ残つていた。

「これからもう一眠りするから、心配させてしまったね」

パチン

言い終わるか終わらないかのうちに平手が飛んだ。

目に涙を溜めたシスターが僕を見下ろしている。

よく見れば目の周りが真っ赤だ。僕が死んだものと思つて一晩中泣き明かしたのだろう。

「心配しましたよー見ず知らずの子供のためにあなたは……」「いきなり頬を張つたかと思えば怒鳴り出し、怒鳴つたかと思えばベッドに横たわる僕の胸に顔をうずめて号泣する。

僕は困惑しながらも彼女の頭を撫でた。もう一眠りは出来そうになり。

生きて村へと帰るために田印代わりのリボンを木々に結んでいく。
恐らく私は『魔物』に襲われるだる。しかし話はそれからだ……。

どこまで進んだのだる。わざと道から外れて森の奥へと突き進むと開けた土地へ出た。

惨劇の現場かと一瞬きょとしだがどうやら違ひらしい。

この前よりも広く、血の跡も無い。

森の中で丸く切り抜かれた空間にぼんやりと青白い月光が降り注ぎ、周囲の黒々とした木々との対比に思わず息を呑む。

しばらく見とれないと目の前の光景に変化が起つた。

月光の届かない森の奥の闇が徐々に広場へとせり出してくるのだ。比喩ではない。球状の闇がゆっくりと月明かりの下にその全容を現した。

全容といつてもただの黒い球体だ。それ以上でも以下でもない。果然と見守っているとだんだん黒色が薄まり、球が霧散した後に姿を見せたのは件の少女だった。

闇の中から無邪気な笑顔を浮かべて現れた少女は一瞬驚いたような表情をして、それからまた無邪気に笑つて言った。

「あーこの前の人間。今日はお腹が空いてるから食べるよ」

ここまでは予定通りだ。

にこにこしながら近付いてくる少女に向かい僕は言つ。

「私を食べる前にまずはこれを食べてくれ」

震えそうになる声をなんとか正常に保ち、僕は鞄の中からある物を取り出した。

重くて仕様の無かつた干し肉の塊。

一抱えもある肉塊に少女は不思議そうな目を向ける。

村の獵師から高値で買い取つたこの肉。

少女は初めて出会つた時に「今はお腹いっぱいだからあなたは帰つていいよ」と言つた。

そうであるなら、こちらが食べられる前に胃袋を満たしてしまえばきっと話し合つ時間が出来ると踏んだのだ。

しかし、生肉にしか興味を示さないという事もあり得る。

興味が僕からこの干し肉に向いてくれなければ恐らく僕は食べられるだろう。

一分の一の賭け。

沈黙。

静寂。

一呼吸置いて少女は肉塊に噛み付いた。

賭けに勝つた。

緊張が解けその場に座り込んでしまつた。

気持ちを落ち着けるために深呼吸をして目の前の少女を眺める。硬い猪の肉を日々と引き裂いて咀嚼している。やはり人ではないのだろうな。

両手で干し肉の塊を掴んで座り込み、一心不乱にもぐもぐと口を動かす少女に語りかけた。

「君はいつも人を食べているのかい？」

「うーん」

何やらもじもじと言つて口にいっぱいに頬張った肉のせいであちらの言葉は伝わらない。

「お腹空いてる時に居たら食べるだけだよ」

口の中の物を飲み込みそう答えるとまた干し肉に齧り付く。

「それじゃあお腹が空いてなかつたら食べないのかな？」

「だつてお腹いっぱいなのにご飯は食べないでしょ？」

「それじゃあ旅人を襲うのは……」

肉塊のおよそ三分の一を食べきつたところで少女は食事をやめた。

「わたしは意地悪な人間と食料しか殺さないもん」

急に少女は立ち上がり踵を返して走って行った。

「明日もここに来るからな！」

闇に包まれて森の奥へと消えていく少女に向かつて私は叫んだ。

目印をたどつて、夜が開ける前には村に帰ることが出来た。

家に帰るなり私はベッドに倒れこんだ。

極度の緊張と疲労で意識が遠くなる。そのまま着替える事もしないで私は深い眠りに落ちた。

目を覚ますとすでに暁だった。

シスターに起こされないで暁まで寝ることが出来るといつのは珍しい事だ。

大抵は騒がしく朝からやつてきて騒々しく家事をこなして去つていく。

少し物足りなく感じながらベッドの上で半身を起こした。そしてそのまま考え始める。

無論昨日出会った少女についてだ。

僕が思うにあの少女は「まだ」邪悪な存在ではない。

今は純粋に生きるために獲物を狩り、自分の身を守るために狩人を殺しているのだろう。

森に迷い込む獲物が偶然人間なのであつて、好き好んで人間を襲つている訳ではないはずだ。

その証拠に彼女は村までやつて来て人を狩つた事はない。

しかし、彼女が人でない事は事実だ。そして『魔物』だという事も事実だろう。だからこのまま他人と関わらないで動物のような暮らしを続けていけばいつか凶惡な怪物に変貌しないとも限らない。そうなればもう、村と敵対するしか道はなくなつてしまふだろう。

僕はそれを防ぎたい。

「聖職者として」なんて重い事は考えていないが、救われる可能性がある者を見捨てたくない。

「寝覚めが悪くなるからな」

想いを一言だけ口に出した後、ベッドから出て遅めの朝食を作り始めた。

四度目の密会で少女はルーミアと名乗った。

誰に名前をつけられたのでもなく存在を実感した時から頭の中に在った名前だそうだ。

そして自分は妖怪だとも言った。人々が暗がりを恐れる心からできた妖怪だと説明してくれたが、僕がいまいち理解していない様子を見せると両手を上げて噛み付く真似をして見せた。

やはり孤独は感じていたのだろう。毎夜食料を持って来て、世間話をして帰る僕に心を開くのにそう時間は掛からなかつた。

「ねえ、人間はいつも何をしているの？」

親しくなつてからルーミアは、しきりに人間社会の事について聞きたがつた。

何を食べるのか、日光を浴びる事は辛くないのか、どういつ暮らしをしているのか。

僕は一つ一つ丁寧に答えた。その度に彼女は溜め息を吐いたり、歓声を上げたりと目を輝かせて可愛らしい反応をした。

「そんなんに気になるならいつその事、村で暮らしてみないかい？」

僕はなるべく平静を装つてさらりと言つた。

目的はこれだ。彼女を正体を隠して村に連れて帰り、教会で僕と生活させるつもりだったのだ。そしてゆっくりと人間としての教育を

して村に馴染ませる。

村で生活をして人の心を知れば、凶暴な怪物になる事はないだろうと考えたのだ。

「でも……。わたしは人間をたくさん殺したよ？それって人間にとつて悪いことなんだよね？」

そう言ってルーミアはうなだれてしまった。

気まずい沈黙が流れ、口上手でない自分を呪つた。
さらに沈黙が続き、すすり泣きが聞こえてきた所で名案を思いついた。

僕は鞄から赤いハンカチを取り出すと俯いて涙を流すルーミアの髪にそっと結んだ。

しゃくりあげながら顔を上げたルーミアの頭を撫でながら僕は言う。
「今君にあげたのは免罪符という物だ。これまで君がした事は全て神様があ許しになるんだ。だから何も悩む必要はない」

「……本当に？」

涙声でルーミアが訊ねる。

「ああ本当だ」

「わたしは友達が出来るの？」

潤んだ目で再度訊ねる。目に涙は溜まっているがもつ泣いてはいいな
いらしい。

「出来るさ。神様が君を許すのだから」

「ありがとう！」

ようやく泣き止んだかと思つたら、また目から涙を溢れさせてルーミアが飛びついてきた。

何故また泣く。

首に回された腕を解こうとしたながら言いかけた僕の口を、ルーミアの幼い小さな唇が塞いだ。

一秒。
一秒。
二秒。
三秒。

虫一匹鳴かない静寂を破ったのはルーニアだった。

不意に顔を離すと、

「ほり！わたし、あなたを食べてないよ！」

何も言えないでいる僕の顔を覗きこみながら彼女は不思議そうに言った。

「どうしたの。顔が赤いよ？まるで鬼灯みたいほおずき」

神父様が森へ入っていくのを見たときは正直に言つてとても驚いた。
そして思わず後をつけてしまった。

真つ暗な森の中を、小さな物音にも怯えながら歩く神父様。
私も神父様と同様に、いや、それ以上に怯えていただろう。
森の奥の開けた土地で魔物が現れたときは思わず悲鳴を上げてしま
いそうになつた。

神父様が襲われたらすぐに助けようと思い、尖つた木の枝を持つて
草むらの中から震えながら事の成り行きを見守つていた。

鬼は神父様の差し出した何かを食べ、一言一言会話をすると森の奥
へと去つて行つた。

ショックで次の日から私は高熱を出して寝込んでしまつた。
夢の中で神父様は何度も何度も鬼に食い殺されて、その度に私は汗
だくなつて目を覚ますのだ。

そしてそんな私に構わないで神父様は毎晩森へと通つた。

高熱に苦しみながら、毎晩出かける神父様の姿を窓から眺めていた。
数日経つて熱が下がり、動けるようになつてから私はまた神父様を
尾行した。

そこで見たものが決定打だつた。

魔物は神父様に抱きつき、あろうことかキスまでしたのだ。

神父様は高熱にうなされる私のことなど放つておいて、鬼と毎夜逢引を繰り返していたのだ。

幼い頃からずっと遊んできたきた私を忘れて……。

毎日毎日家事をこなしていた私を見ないで……。

誰よりも神父様の事が好きな私を捨てて……。

……鬼に魅入られている。

私はふらふらと森を抜け出して村に帰り、村長の家の扉を叩いた。

家に帰つてもまだ心臓が異常な速度で血液を送り続けている。

その後、しどろもどろになりながらも明日の夜から教会で一緒に暮らす事を約束して帰ってきた。

僕の動揺を知つてか知らずか、彼女は始終にここにこと笑つていた。ルーミアの顔を思い出すと同時に、小さく柔らかい、桜の花びらのような感触を思い出してまた赤面する。

今晩は眠れそうに無いのでルーミアを迎えるための掃除を一晩中行つた。

翌日の晩、僕はいつものように森へと向かつた。

こうやって食べ物を持って深夜に森へ入る事ももう無いのだろう。

「どこに行く気だい。 神父さん」

村から出る寸前に声を掛けられた。

心臓が跳ね上がり体が硬直する。振り返ると村長が立っていた。

「やあ、こんばんは。どうも寝付けないから散歩をしていたんですね」「よ

引きつった笑顔で答える。

「ほう、こんな夜中に、鬼の出る森へ散歩かい。また豪胆な神父さんも居たもんだな」

村長はそう言いながら固まる僕を通り越して村の出口と僕の間に立つた。

まずいな。

今はまだルーミアのことを知られる訳にはいかない。

どうやって村長を撤こうかと考えを巡らせていると足音が聞こえた。

「聞きたいことがあるんだ」

どこからか現れた男が僕の右腕を掴む。

いつの間にか僕は村人達に囲まれていた。

「あなたはきっと鬼に魅入られています。私はあなたを救いたいの」「村人の輪の中から姿を現したシスターが虚ろな目で言う。どうやら見られていたらしい。

焦りと不安、恐怖と後悔で胸の奥がざわざわと波立つた。

今の状態で村人達の目に僕は、「魔物を手引きして村人を襲わせていた裏切り者」と映つているだろう。

村人達から立ち上る剣呑な空氣から言つて、どこを見られたかは知らないが、事実に大幅な脚色を加えて、有る事無い事シスターが言いふらしたに違いない。

とにかく一か八か包囲網を突破しようと足に力を込めた時硬いものが右のこめかみに当たった。

視界が明滅して地面に膝をつく。わき腹を誰かに蹴り上げられた。

満月の下、村人達の狂気が一気に膨れ上がるのを最後に感じて、僕の意識は途切れた。

いくら待っても人間は来ない。

いつもならもう来てもおかしくない時間だ。

それに今日は大事な約束をした日。

わたしを村に連れて行つてくれると約束をした日だというのに。いらいらして広場を歩き回つていると遠くから声が聞こえた。

「魔物よ！お前の仲間はここに居る。会いたければ出て来い！」恐怖をかき消すために怒鳴るようなその声は村の方から聞こえる。何が起きているのかはよく分からぬけど、嫌な事が起きているのを感じてわたしは村へと向かつた。

村は家々に松明が掲げられて、まるで昼のよつだった。

私が村に踏み入ると「ひっ」とあちこちから息を呑む声が聞こえる。物陰に隠れている人間に、私が探している人間がどこか聞こうとする目の中に子供が出てきた。

顔にはお面を着けていて、数回私を手招きすると足をもつれさせながら村の奥へと駆けて行つた。

あの子供も私が怖いのだ。

だけど大丈夫。わたしの罪を神様が許してくれた事をあの人にがみんなに言つてくれたら怖がれることも無いはず。

私は子供の後についていった。

胸騒ぎはしていたが、あの人間に会えばこの胸騒ぎも取まるだろ？

と思つていた。

村の広場に人間は居た。両手を広げて閉じた足を伸ばした変な格好で木の板に磔られていた。

生きているのか死んでいるのか。松明があるけど遠すぎてよく見えない。近寄つて確かめようとした途端、横から何かが頭にぶつかつた。気にしないで人間の所へ進む。

また一発。今度は胸に。

続いて右目に当たる。

「銀だ！銀の弾を使え！」

怒鳴り声が聞こえる。

次の弾は痛かった。

当たった部分から焼けるような痛みが広がって血が流れた。

それでも私は歩くのを止めない。

次々と銃弾が体に当たる。

今までの物とは違う、耐え切れないほど痛い。

目の前が時々暗くなりながらも私は人間までたどり着いた。力尽きて足元へと崩れ落ちる私を人間は濁つた半開きの目で見下ろした。

他の人間にさんざん叩かれたのだろう。

顔はアケビのようなどす黒い紫色になっていて、腕も足も、木の枝みたいに変なところから折れ曲がっているのをむりやり伸ばして磔てある。

わたしを狙つて外れた弾が人間の太股に当たる。
だけど人間はピクリとも動かない。

この人間はもう……。

体が熱く、熱くなつっていく。

後ろから飛んできた弾が頬を掠めて人間に当たつた時、わたしの中で何かが爆発した。

わたしは力いっぱい闇を広げた。

もっと濃く。もっと厚く。もっと暗く。もっと広く。

胸の奥から湧き上がる感情をそのまま周囲に振り撒くように。突然闇に包まれて村はパニックに陥つた。

遠くから銃声が聞こえて、悲鳴に、何かが壊れる音。

見ることは出来ないけど、松明が倒れて火が燃え広がつたらしい。パチパチと爆ぜる音がどこから聞こえて、熱い風がわたしを包む。人の焼ける匂いがしてきたけど食欲は湧かない。

わたしは手探りで人間を板から降ろして、今はもう冷たいその胸で眠つた。

月明かりに照らされて目が覚めた。

村は所々に人と家の燃えた跡を残して消え去つていた。
わたしの体の下にはまだ人間がいた。

何も映さない目で欠けた月を見ている。

「あーあ。これで人間食べ放題だよ」

人間は答えない。

「あなただけ食べて食べられるよ」

私の声だけが響く。

「あなたの持つて来る食べ物、おいしくなかつたよ」

青白い月光の中わたしは一人だ。

無人の更地でわたしはひたすら泣いた。

それからしばらくして、わたしはここ、幻想郷にやってきた。

村が無くなり、わたしの存在はみんなに忘れられたのだ。

わたしが忘れられた事はしかたが無い。

だけど、妖怪を愛してくれた聖者がいた。

人を襲い、忌み嫌われたわたしに、神の愛を与えてくれた聖者は十字架に磔られた。

この事を忘れてはいけない、風化させるわけにはいかない。
耳が聞こえない人間にも、言葉を知らない動物にも、伝えなくてはならない。

闇を操るわたしに暖かな光を注いでくれた聖者が居たことを。
聖者は優しさのせいで死んだことを。

わたしは大きく両手を広げて問う。

「聖者は十字架に磔られましたって言つてるよう見える?」

(後書き)

お疲れ様です。
感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7775j/>

ほおずきの思い出

2011年10月10日01時00分発行